

2011年の Bersih 2.0 は 2007年の Bersih から何が変わったのか

伊賀司*

2011年7月9日の Bersih 2.0 による自由で公平な選挙を求めるデモは、マレーシアのみならず日本や欧米の報道機関もニュースとして取り上げた。もちろん Bersih 2.0 のデモの様子はオンラインでも話題になり、次々と画像がアップされたり、ツイッターやフェイスブックなどのソーシャル・メディアでも議論が巻き起こっている。Bersih 2.0 に関しては、デモ終了後も議論が続いており、その影響がどのようにマレーシアの政治や社会に現れるかは今後の展開にも左右されると思われる。

自由で公平な選挙を求めてのデモ行進は 2007 年にも起こっており、その際は Bersih の名称で呼ばれていた。今回は 2007 年からヴァージョンアップした Bersih 2.0 による 2 回目のデモ行進となる。これまでの観察から筆者は、2007 年に起こった Bersih と比較して Bersih 2.0 には注目すべき相違が 3 点あったと考える。

Berish2.0≠野党?

Bersih 2.0 が 7 月 9 日にデモ行進を行う前日、Bersih 2.0 代表のアンビガや Bersih 2.0 の運営委員は、野党の党首らとともに共同で記者会見を開いた。その時にアンビガは、Bersih 2.0 は翌日に予定されているデモ行進を行う前に既にマレーシア人の政治的覚醒に大きな役割を果たしたことを指摘した。この野党党首が同席した会見と、そこでの彼女のコメントは、Bersih 2.0 の限界と可能性を示している。

Berish2.0 と Berish との違いは、運営主体が野党から NGO へと移り、非党派的立場から選挙制度改革を求めようとした点にある。実際、結成されてしばらくは、Bersih 2.0 は選挙管理委員会との対話

やフォーラムを通じての市民への啓蒙活動を続けた。ただし、独立委員会ながら、依然として政府の強い影響下にある選挙管理委員会には Bersih 2.0 の求める制度改革を実行することができないままであった。

Bersih 2.0 の活動の転機となったのは 4 月のサラワク州選挙である。この選挙において郵便投票に対する不満から批判を強めた Bersih 2.0 は、2007 年に続いて再びデモ行進によって局面を打開する戦略に出る。デモ行進の計画を最初に持ち出したのが Bersih 2.0 側か野党側かは分からない。野党側では PAS はデモ行進にかなり積極的で、5 万人の動員をかけることも豪語していた。また、野党 PKR の指導者アンワールは、Bersih 2.0 を主導しようとした(或いは主導しているように見せようとした)形跡がある。アンワールは 6 月 19 日の PKR の会合で、もしナジブ首相が選挙制度改革を約束するならば Bersih 2.0 の代表アンビガに活動をやめさせるよう呼びかけるとコメントした。このアンワールのコメントに対し、アンビガはすぐに不快感を示し、Bersih 2.0 の活動方針を決めるのは自分たち運営委員会であるとコメントしている。

政府・与党による Bersih 2.0 の批判の最大のポイントは、Berish2.0 が純粋な選挙制度改革を求めているのではなく、来るべき総選挙のための野党による党派的な選挙キャンペーンであるとした点であった。アンビガらのコメントに見られるように、少なくとも Bersih 2.0 の中核メンバーは政府・与党からの批判も意識して、野党との間に一線を引いて初期の非党派的立場を維持しようと試みていた。

* 神戸大学研究員

しかし、非党派的立場で始まった Bersih 2.0 の活動に限界があったことは否定できない。そもそも、デモ行進を行うと決定した時点で、現在のところ実際に参加者を大量動員できるのは野党でしかありえない。また、デモ行進日の7月9日が近づくにつれ、Bersih 2.0の活動家が政府によって大量に逮捕され、アンビガら Bersih 2.0の運営委員個人への脅迫も相次ぐ中で、個人や十分な組織化がされていない団体が活動を続けるには困難があった。

その帰結がデモ行進日前日の野党党首らとの共同の記者会見であったと言えよう。ここでアンビガは、野党党首との共同記者会見を行った理由として、デモ行進日を前に400人を超える Bersih 2.0の活動家の逮捕に対する政府・BNへの抗議とともに、自身の身の安全を挙げている。Bersih 2.0は Bersihとは異なり、非党派的立場から活動を始めたものの、実際の活動を進めていくうえでは限界に直面することになった。

デモ行進前からの争点化

2007年の Bersihと Bersih 2.0が異なる2点目は、実際に7月9日のデモ行進が行われる1か月前からネット・メディアだけでなく、テレビ、新聞などの主流メディアで Bersih 2.0とその関連する活動が盛んに報じられ、争点化されてきた点である。2007年の Bersihのデモ行進を主流メディアが積極的に取り上げたのは、実際にデモが起こってからである。2007年当時の主流メディアでは、デモに対する政府指導者による事前の警告等は見られたものの、Bersih関連の報道の絶対量は必ずしも十分ではなかった。

しかし、今回の Bersih 2.0の活動については、デモ行進の1か月前から(その報道の姿勢はどうあれ)主流メディアでもかなりの量の報道がなされてき

た。今回の Bersih 2.0をめぐるデモ前からの報道が主流メディアでも活発だった理由は、2007年の Bersihのデモ行進が翌年の総選挙の結果に影響したという前提があったためである。それに加えて、Bersih 2.0の代表として明確なメッセージを発信し続けることができたアンビガの存在、(メディア報道の観点から見ての)「敵手」が存在したことや、予想外のアクター(=国王)の登場が Bersih 2.0をめぐる報道を活性化したことなども無視できない。

報道において Bersih 2.0の「敵手」となったのは、UMNO 青年部と、無所属の下院議員のイブラヒム・アリが率いるプルカサである。両者ともに、Bersih 2.0に対抗して7月9日にデモ行進を行うことを発表した。Bersih 2.0も含めて、この3団体は警察にデモ行進の許可を申請したものの、却下されている。さらに、Bersih 2.0がシンボルカラーとして「黄」シャツを着用したのに対し、UMNO 青年部が「パトリオット」の活動プログラム名の下で「赤」シャツを着用したことは、隣国タイの状況と合わせて、メディアが報道しやすい構図を作り上げることになった。

さらに、国王が7月3日に Bersih 2.0に対し、その本来の意図は評価するものの、デモ行進の実施には反対し、中止を求める声明を発表する。この国王の異例の声明で Bersih 2.0のニュースとしての価値はますます高まった。他方で、デモ行進の最終目的地を王宮に定め、選挙制度改革を求める文書を国王に提出するパフォーマンスを目指していた Bersih 2.0にとって、この国王の声明は、デモ行進の正当性や意義を大きく動揺させることになった。結局、Bersih 2.0は緊急の運営委員会で国王の声明を受け入れることを決定し、7月5日にはアンビガを含む Bersih 2.0の代表3名が国王と謁見し、Bersih 2.0の立場を説明することとなった。

国王との謁見後、アンビガは街頭でのデモ行進を取りやめ、ムルデカ・スタジアム内でのデモを発表した。

後から見れば、この国王の声明が発せられ、Bersih 2.0 の代表が国王と謁見することを果たした段階で、今回の Bersih 2.0 の目的の大半が果たされたとも言えるだろう。1 か月弱の間、国内の話題の中心にあったことで、Bersih 2.0 は国民の間で認知度を高め、その意義を国王にも公式に認めさせることができた。7 月 8 日の野党党首との共同会見でアンビガが述べたように、国民の政治的意識の向上に寄与することができたと言えるだろう。

ただし、Bersih 2.0 が申請したムルデカ・スタジアム内でのデモは、結局政府に却下される。そこで、Bersih 2.0 はムルデカ・スタジアムに向けてデモ行進を行うことを発表し、7 月 9 日を迎えた。

衆人が見守るデモ行進——メディア・ポリティクスの時代

ムルデカ・スタジアムに向けての Bersih 2.0 のデモ行進参加者の人数は、1 万人から 1 万 5 千人とも言われ、2007 年の Bersih の半分かそれ以下に留まっている。だが、今回の Bersih 2.0 の国内外のメディアの注目度は前回より格段に高い。Bersih 2.0 が前回以上にメディアに注目された背景には、上述のように、実際にデモが行われる前から Bersih 2.0 がニュース的価値の高い話題であった点や、当日に 1600 名を超える逮捕者が出た点などの他にも理由がある。

今回のデモ行進と 2007 年のデモ行進の映像を見比べて分かるのは、今回のデモ行進ではカメラを手に撮影する人間が明らかに増えている点である。この「カメラマン」を構成する人々の中には、国内だけでなく海外の報道機関からのジャーナリスト

が数多く含まれている。また、今回の Bersih 2.0 のデモでは、海外の 29 の都市で Bersih 2.0 のデモが行われたという。Berish2.0 は国内に留まらず、グローバルな規模で人々の注目を集めようとし、それに成功したと言えるだろう。

「カメラマン」の中には、首から報道パスを下げていない人も多いが、この人達は専門職ジャーナリストではなく、いわゆる「市民ジャーナリスト」であると考えられる。2007 年の Bersih のデモ行進でも、ブロガーによる情報発信が人々の注目を集めたが、オンラインを通じた市民ジャーナリストによる情報発信は、今回のデモ行進でもますます拡大していることが観察できる。ツイッターやフェイスブックなどのソーシャル・メディアで現在も盛んに行われているのは、当日のデモ参加者の体験や感情の共有である。今後、Bersih 2.0 がどのように評価され、実際の政治過程に影響を与えるか否かを見極めるには、新聞やテレビの報道とともに、こうした市民ジャーナリストによるオンラインでの議論にも注目する必要性が高まっている。

ナジブ首相がデモ行進の翌日、直ちに行ったのは、自らデモの現場に行き、人々と触れ合っている姿をメディアを通じて広めることであった。他方で、アンワールはデモ参加によって自身が負傷した姿を複数のメディアを通じて広めようとした。シンボルカラーを使って視覚に訴える形で動員を行った Bersih 2.0 と UMNO 青年部とを併せて考えるならば、現在のマレーシアは、メディアを通じたパフォーマンスやイメージの喚起によってテレビ画面やモニターの向こうの人々に「どのように見られるか」が重視されるメディア・ポリティクスの時代により一層突入しつつあると言えるだろう。

(2011 年 7 月 26 日)